
いたずら

宮本司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いたずら

【著者名】

富本司

N2361E

【あらすじ】

「じどものいたずら・・・・・。」じどもはいたずらを通じて学び、成長していくのかもしない。そのいたずらに付き合わされる人々の運命とは・・・。

「お母さん。」めんなさい

「謝つても許しません。今日とこいつ今日はお父さんと言こますからね。またこんないたずらして」

母親は半べソをかいている子供の手をひきながら長い廊下をどんどんと進んでいく。

「もうしないから」

子供は最後のお願いとこいつよつて、母親の手をひっぱり精一杯の抵抗を試みた。しかし母親は聞く耳すらもつてくれない。

「こいつの前いたずらしたときもそつ言つてたでしょ。お父さんは未だにあのときのあなたのいたずらの後片付けに苦労してるのよ」

子供は母親の言葉をひどく心外を受けたといつぱつこまつといつから反論した。

「あれはいたずらじゃないよ。四足歩行の動物が一足歩行できるかどうか実験しただけだよ」

「その変な実験のせいで大変なことになつてるんでしょ。今お父さんが一生懸命もとに戻そうとしてるのに。あなたつて子はまたこんなしようもないいたずらして」

真剣な反論も全くこうをそうせず、母親の怒りのボルテージは上がる一方である。子供は次なる作戦『泣き落とし』を試みた。

「お願ひ。お父さんには言わないで。今度こいつおもちゃ取り上げられちゃうよ」

「いいかげんにしなれ。ほひ、お父さんのお部屋に入るわよ」

長い廊下のつきあたりにそびえる重厚な扉を押し開け、母親が部屋へと入つていく。子供もあきらめた様子で、母親の後ろに隠れるよつにひつそりと部屋へと入る。父親は部屋の奥のデスクに座り、難しい顔でモニターと手元の資料を交互に睨みつけてくる。

「あなた……」

母親が静かに父親に声をかける。父親の鬼気迫る形相を見て、母親もさつきまでのテンションが一気に下がってしまったようだ。しかし、父親は意外にも母親のほうに笑顔で振り返った。

「おー。お前か。聞いてくれ。ようやく半数まで減ったぞ。やはりこの前の大地震と大津波が効果あったようだな」

「それは、ようじございました」

母親は父親の機嫌がいいことに安堵しつつも、これから報告しなければいけない『子供のいたずら』を思つと、口が重くなつた。一方、父親は上機嫌で会話を続ける。

「やはり進化しすぎてしまつものは、全滅させるしかないからな。これで恐竜の時のように氷河期でも起こせば、一気に全滅するだろう」

上機嫌な父親も自分と周りとの温度差を感じ、妻に視線を向ける。妻はなんともいえない複雑な表情でわが子を見つめている。

「おい。また何かいたずらしたのか」

父親は不安にかられ子供に問いかける。

「いたずらじゃないよ。アダムとイヴが『どうしても食べたい』つていうから食べさせてあげただけだよ」

子供は自らの保身のため、言い訳めいた回答をした。それがさらに父親の怒りのボルテージを上げることになるとはまだ気づいていない。

「食べさせたつて、何を」

父親は精一杯、平静を保ちつつ子供に問いかけた。

「智慧の実」

子供は平然と父親の問いに答える。

一瞬の沈黙が部屋に訪れる。そして、怒りのボルテージが最高潮に達した父親の怒声がその沈黙を破る。

「ばかもの。

『人間に智慧の実を食べさせた』だと。この前『猿に2足歩行をさ

せた時』に動物の進化が引き起こす弊害を嫌というほど教えただろう。ようやく人類を半減させたところだというのに「父親は言い終えるやいなや、頭を抱えて2・3歩ようめいた。母親が手を貸しながらいすに座らせた。

「もうだめだ。智慧の実を食べた人間の進化は神の力では止められない。こうなつてしまつては、この前のスーパー星のように自滅するまでほつておくほかないな」

父親が独り言のようにつぶやいた。一方子供はあつけらかんと母親に質問をした。

「お母さん。やつぱりぼくの地球取り上げれちゃうかな?」
その言葉が再び父親の怒りのボルテージをMAXにした。

「ばかもの。

お前は地球が自滅するまで謹慎だ。それまで、地球の観察日記でもつけていろ」

「あなた。そんなに叫ぶとまた血圧があがりますよ」

あれから3万年後。

神様は観察日記をつけながら、とある地球人の会話を聞いていた。

A : 「なー。人類つてどうして生まれたんだろうな?」

B : 「なんだよ急に。哲学めいたこと言い出して」

C : 「はつはつは。案外『神様のいたずら』なんじやねいの」

Cの言葉にAとBも思わず笑みをもらす。

しかし、Aの笑顔の表情は他の2人とは少し違う淒みを持っていた。へらへらと笑いながら歩いていたBとCは突然立ち止まつたAを確認するため後ろを振り返つた。

B : 「おいA、何してんだよ。置いていくぞ」

Aはにたにたと笑いながらズボンのポケットからスイッチのようないしを取り出した。そのスイッチを左手の手のひらにのせるとBとCに話かけた。

A：「この地球が『神様のいたずら』で作られたなんなら、『人間のいたずら』で終つたつていいよな」

BとCはAの言つてゐる意味がわからずただAを眺めていた。次の瞬間、Aは自分の手のひらに置かれたスイッチを押した。

BとCは最期までAの行動の意味を理解することはできなかつた。Aがスイッチを押した瞬間に地球中の核施設が爆発した。地球上の人類、動物、植物すべてが地球とともに宇宙のちりとなつたのだ。

神様は観察日記の最後に「おしまい」と書き込むと、日記を手に握り立ち上がつた。

「地球も自滅したし、次の星も^{おもひがや}うえるかな」

神様はうきうきとした足取りで父親のもとへと急いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2361e/>

いたずら

2010年10月16日02時55分発行